

日  
鮮  
古  
代  
地  
名  
の  
研  
究



# 日鮮古代地名の研究

朝鮮總督府囑託  
文學博士

金澤庄三郎

朝鮮開國の古は邈として知るべからず。古紀傳へて神人檀君あり、檀木の下に降り、白岳に都し、國を朝鮮と號せりと稱すといへども、これ寧ろ貊種族の古傳説たるべきこと、後節に述ぶるところの如し。殷遺裳へて箕子亂を東方に避くるや、朝鮮の名始めて興る。然れども載籍の徵すべきもの尠く、其の文化も半島の中部以北に限られたるが如し。四十餘世の孫箕準に至つて、燕人衛滿のために逐はれ、衛氏傳ふること三世にして、亦漢の武帝に滅ぼさる。

半島の南部には古くより韓種族あり、馬韓、辰韓、弁韓の別ありて、これを三韓と謂ふ。然れどもその歷年世數ともに知るべからず。武帝朝鮮の地に四郡を置きし後、新羅、百濟、高句麗の三國鼎立して起る。百濟と高句麗とは北方扶餘種族の相前後して南下せるもの、百

濟は馬韓に、高句麗は古朝鮮の地に國を建て、新羅は辰韓の中より起れり。これより後三國の間、侵寇常に熄まざりしが、新羅遂に半島を統一し、高麗朝鮮を経て今日に至れり。然れども朝鮮史籍の堙滅すること甚しく、上代の史實は日本及び支那の記録によりて僅にその一斑を推測し得るに過ぎざれば、半島古代の真相はこれを今後の研究に俟つべきもの極めて多し。

本論文の趣旨は韓種族たる新羅も、扶餘種族たる百濟高句麗も、共に本來は貊(古音 *Mal*)族にして、朝鮮住民の大半は北方種族の南下せるものなることを、言語の上より立論し、日本及び朝鮮の古地名間に離るべからざる關係あることを主張せんとするにあり。

## 二

史を按ずるに高句麗百濟の扶餘族より出でたること疑ふべからず。高句麗の始祖朱蒙は扶餘の亡人にして、百濟の始祖溫祚は朱蒙の第二子なり。故に百濟王は扶餘を姓とす。百濟王餘禪廣(持統紀)、百濟王子餘昌(欽明紀)、百濟王餘句(晉書)の類にして、百濟聖王都を泗泚に遷してよりは、國を南扶餘と稱せり。日本紀に扶餘をクダラと訓じ、續博物志に百濟を余國と記したるなど、皆その扶餘の出なるがためのみ。高句麗が高氏を姓とし、百濟の

餘氏と同じからざることにつきては、別に説あり。二國異姓なるが故に、同族ならずとの説は従ひ難し。百濟王餘慶が魏に上れる表文には、「臣與高句麗源出扶餘」と見え、其他「百濟扶餘別種也」(新唐書)、「高句麗言語諸事多與扶餘同」(魏志)、「其先出自扶餘」(中略其衣服飲食、與高句麗同)(魏書百濟傳)、「高句麗者出扶餘」(魏書)など微證頗る多し。

百濟は魏志後漢書には伯濟とありて、建國の始は馬韓五十四國中の一なり。而して、新羅は隋書新羅傳に、「其王本百濟人、自海逃入新羅、遂王其國」と見え、南史に、「新羅語言待百濟而後通」とあれば、新羅百濟の間に幾分種族的關係ありと疑はる。魏志辰韓傳に、「名樂浪人爲阿殘、東方人名我爲阿、謂樂浪人本其殘餘也」とあるは俗傳に過ぎざるべけれど、亦新羅が北來の種族たるべき證ならずとせんや。且弁韓が馬韓と雜居し、言語法俗の相似たるよしも見えたれば、南方の三韓種族と北方の扶餘種族とは、人種言語を同じうせるものなること略これを推知すべし。

### 三

以上の事實は言語の研究によりて亦これを證すべし。凡東西の民族はいづれもその移動の方向を言語の上に印するを常とす。例へば

梵語

pūrva (東) 前の義

apara (西) 後の義

dakshina (南) 右の義

śāhya (北) 左の義

即ち印度民族は西より東に向ひて進みたるものなるが故に、東を前とし、西を後とす。  
 Uigur 人種に於ても亦然り。

同紇語

ōng (東) 前の義

kat (西) 後の義

kot (北) 下の義

tös' (南) 上の義

下と上とはまたこれを前後と考ふべき理由あり。後にいふべし。故にこの人種は西南より東北に向ひたるものと想像せらる。漢字北も説文に「从匕也二人相背」とありて、もと背後を意味すれば、其人種の南下せるものなること明なり。更に轉じて高句麗人種に就き、

魏志に擧げたるその五部と後漢書の註とを見るに、

- |   |    |    |        |
|---|----|----|--------|
| 一 | 内部 | 一名 | 黃部即桂婁部 |
| 二 | 北部 | 一名 | 後部即絶奴部 |
| 三 | 東部 | 一名 | 左部即順奴部 |
| 四 | 南部 | 一名 | 前部即灌奴部 |
| 五 | 西部 | 一名 | 右部即涓奴部 |

また日本紀には高麗の使者に上部下部の名屢見え、任那の地名にも上<sup>オコンタリ</sup>哆喇下<sup>アルレタリ</sup>哆喇あり因て思ふに、これ等の上下にも亦前後南北の意あらん。國語にて後夫をウハラといひ、前夫をシタヲといふは、即ちこの理より出づ。

日本紀に南加羅を訓じてアリヒシノカラといふ。アリヒは今日の朝鮮語 *ari* の古形 *ari* にして、「前」の義なり。また朝鮮語にて慶尙・全羅・忠清の三南道を *apdo* (前道) といふ。而して龍飛御天歌には、「北」を訓じて *hwi* (後) とせり。これ等の事實はいづれも朝鮮人種南下説の證據とするに足るべし。

これより更に進んで、高句麗、百濟、新羅の三國が何れも北方貊人種の出なることを論ぜんとす。高句麗、百濟の二國名は朝鮮にて *ko-ku-ryō*, *paik-chyōi* といひ、我國にては古くよりこれを *コマクダラ* と呼び來れり。朝鮮にても *kadar* と稱する種族の名殘れども、その所屬位置共に不詳なれば、*コマクダラ* は我國にのみ傳はれる古稱と見て然るべし。この *コマクダラ* の原義に關しては、古今諸家の說數種あれども、いま新に別種の意見を提出して、*貊 (Gak)* といふ種族の名と聯結せしめんとす。先づ百濟より始めん。

百濟は魏志及び後漢書に伯濟と見え、其名稱の起原に就きては、初以「百家濟」因號「百濟」(北史)といひ、また一説に「以十臣爲輔翼、國號十濟、後百姓樂從、更號百濟」といへり。然れども地名の起原に關しては附會の説多く、これ等も亦信じ難し。即ち高句麗好太王碑銘には「九年己亥、百殘違誓、合倭の如く、百濟を百殘と記したるを奈何にせん。總じて朝鮮古代地名の讀法には難解のこと多く、文獻備考にも「記以方言吏語、雜行名號之、厖乱甚矣」と見えたり。こゝに方言吏語といふは、我國の萬葉假名の如く、漢字の音訓を用ひて朝鮮語を記せるをいふなり。今新羅景德王の世に改稱したる地名を其舊稱と對比するに、略上代に於ける漢字音訓使用の様を知るべし。

- (一) 舊地名を類似音の好字に改めたるもの



眞寶縣 (chin-po)	本	深巴火 (sim-pha)
禦侮縣 (o-mo)	本	陰 達 (im)
嘉善縣 (ka-syön)	本	加害縣 (ka-hai)
道安縣 (to-an)	本	刀良縣 (to-ryan)
道同縣 (to-tong)	本	刀冬火 (to-tong)
嘉壽縣 (ka-syu)	本	加主火 (ka-chyu)
壽同縣 (syu-tong)	本	斯同火 (sä-tong)
功成縣 (kong-syöng)	本	功未達 (kong-mi-tar)
金地縣 (küm-chi)	本	仇 知 (ku chi)
地育縣 (chi-yuk)	本	知 六 (chi-ryuk)
同福縣 (tong-puk)	本	豆夫只 (tu-pu-ki)
務安縣 (mu-an)	本	勿阿兮 (mur-a)
積利縣 (chyök-ri)	本	赤里忽 (chyök-ri)

右は本朝元明天皇和銅年中に諸國郷の名を好き字二字に改められたると同じく、いづれも類音の好字を選べるものにして、功未達を功成とし、加害を嘉善とせるは、其音に拘

らずして、反對の好字を選べるものなり。

(二) 舊地名に音讀せるものゝ義譯

兔山縣 本 烏斯含達 (o-sā-gam-tar)

三陟縣 本 悉 直 (sir-chik)

冠文縣 本 高思曷伊 (ko-sā-kar-i)

清風縣 本 沙熱伊 (sa-nyōr-i)

翊谿縣 本 於支吞 (o-ki-thān)

泗水縣 本 史勿縣 (sā-mur)

松峴縣 本 夫斯波衣 (pu-sā-pha-ii)

松山縣 本 夫斯達 (pu-sā-tar)

海曲縣 本 波 旦 (pha-tan)

鉛城縣 本 乃勿忽 (nai-mur-hor)

烏斯含達の古音は o-sā-gam-tar にして、これを兔山と改めたるはその義譯なり。即ち兔の古名は osāgam と覺しく、古く山を tar s へり。これと同じく三の朝鮮語は soit、冠は kas、文は kūr、清風は syōnur、谿の古言は thān、水は mur、松の古言は pusa、峴は pau、海は pata、

鉛の古言は *nainnur* なり。

(三) 舊地名に訓讀せるものゝ義譯

比屋縣 本 阿火屋 (*a-pur-ōx*)

高丘縣 本 仇 火 (*ku-pur*)

餘善縣 本 南 内 (*nam-an*)

金壤縣 本 休 壤 (*sui-yang*)

火の朝鮮訓は *pur* にして、比の朝鮮語は *aor* なり。これと同じく、火の訓は *pur* にして、丘の古言は *pur*、内の訓は *an* にして、餘を *naman* といい、休の訓は *sui* にして、金を *soi* といふ。

(四) 舊地名に訓讀せるものゝ音譯

密津縣 本 推 浦 (*mir-pho*)

雲峰縣 本 母 山 (*ōmi-san*)

陰峰縣 本 牙 達 (*ōm-tar*)

翰山縣 本 大 山 (*han-san*)

推の朝鮮語は *mir* にして、密の朝鮮音は *mir* なり。これと同じく、母の朝鮮語は *ōmi* にし

て雲の音は *nu*、牙の朝鮮語は *on* にして陰の音は *un*、大の古言は *han* にして翰の音は *han* なり。

斯の如く朝鮮の地名に用ひられたる漢字は音訓相交りて一様ならず、百濟の如きも往時に於ては果して如何に呼ばれたるか容易に判ずべからず。然るに國史にありて常にこれをクダラと讀めるは、實に研究上得易からざる資料といふべし。蓋し百濟伯濟、百殘の百伯はいづれも音讀すべく、濟殘はこれを訓讀すべきものと考ふ。伯百の古音は共に *pak* にして、濟には *naru*、殘には *toro* の訓あり。故に百濟はこれを *pak-naru*、百殘はこれを *pak-toro* と讀むべし。案ずるに朝鮮の古代にはタラと類音の地名多く、書紀に見えたるものゝ中にも、枕彌多禮多々羅多羅圖禮耽羅周留墮羅などありて、朝鮮の古言には山を *tar* といひ、今日といへども知異山(頭流豆流頭留とも書し、新羅にては地理山といへり)の如き山名に其跡を留めたり。而して古代建國の始は多く山上に於てし、今日の都府の基は丘陵に萌したりといへば、朝鮮地名中のタラの語原は山にして、國又は都邑の義に用ひられたるものなるべし。このタラはまた轉じてナラとなる。今日の朝鮮語「國」を稱して *nara* といふは即ちこれなり。朝鮮語に於ては *nt* の兩音特に密接の關係を有して屢相轉換すれば、百殘の殘 (*toro*) 轉じて百濟の濟 (*naru*) となるは怪しむに足らず。なほこの

事實を證すべき例あり。百濟の都熊川を雄略紀に久麻那利コマナリと訓めるは熊の朝鮮語 kom<sup>1</sup> 川の朝鮮古言 nari に據れるものなるが、これと同一地名を天智紀に熊山とせるは nari (川) と tar (山) とを通はせたるものにして、新羅がこれを熊州と改めたるはその義譯なりと知るべく、その他高句麗の地名奈生 (na-nar) を新羅にて奈城といひ、同じく高句麗の地名横川を横城と改めたる類あり。これを要するに百殘はもと pak-tar と讀み、百濟は pak-nara と讀みたるものにして、その pak は貂族の義 tar 及び其轉語なる nara は山城又國の義なれば、百殘百濟いづれもその原義はこれを貂族の國と解すべし。而して百濟王が扶餘を姓とし、其一字を用ひて餘と稱したる如く、貂 (pak) も省略せられて ku となれるものならん。この事なほ高句麗の條に述ぶべし。されば百濟を我國史にクダラと訓めるは實に此古稱の殘れるものにして、本研究の端緒も亦實にこゝに發せるなり。

## 五

百濟國の原名を pak-tar とすれば、檀君の傳説はまた此種族の中より出でたりとすべき理由あり。東國通鑑の外紀に、東方初無君長、有神人降于檀木下、國人立爲君、是爲檀君、國號朝鮮、是唐堯戊辰歲也、初都平壤、後徙都白岳、至商武丁八年乙未、入阿斯達山爲神、と見え、そ

の他白岳を阿斯達山なりとし、或は今の文化縣九月山なりといひ、多少傳への異なるあり。殊に三國遺事中の記事の如きは、甚しく佛説を混じれば、これ等は必ず僧徒の手にて脚色せられたるものなるべけれど、この傳説の根本は貊國 (pak-tar) の名に因めるものにして、貊人種古來の口碑に基けるものなりと考へらる。

新羅の始祖の姓を朴 (朝鮮音 Pak) 氏といふことにつきて、三國史記に「始祖姓朴氏、中略高墟村長蘇伐公、望揚山麓、井傍林間有馬、跪而嘶、則往觀之、忽不見馬、只有大卵、剖之有嬰兒、出焉、則收而養之、及年十餘歲、岐嶷然夙成、六部人以其生神異、推尊之、至是立爲君焉、辰人謂瓠爲朴、以初大卵如瓠故、以朴爲姓」と見え、また大輔瓠 (Pak) 公につきては「瓠公者未詳其族姓、本倭人、初以瓠繫腰、度海而來、故稱瓠公」とあり、瓠の朝鮮語は Pak にして、朴の朝鮮語は Pak なれば、三國史記の記事はこの兩姓と瓠とを結び付けたる一種の語戲にして、かくの如き解釋法は我國の古史にも屢散見するところなり。今この見地より檀君の故事を觀察するに、檀の朝鮮語は paktar にして、白岳 (白の音 pak 岳の訓 tar) は pak-tar 九月山 (九の音 ku 月の訓 tar) は ku-tar と讀まるべければ、檀君の傳説は貊人種の國、即ち pak-tar (百濟) の國名に因縁するところあるや疑を容れず、故に此傳説は古朝鮮と關係なく、全く百濟 (pak-tar 略し) y kutar) 種族の中より發生せるものなることを主張するなり。

前漢書に「高勾麗或謂之勾驪」と見え、外記に「朱蒙初誕、舉國高之、故因以高爲氏、また「朱蒙曰、我是日子、承日光而生、遂以高爲氏」、朱蒙都沸流水上、自謂高辛之後、國號高勾麗、因姓高氏」とあれば、高が建國者の姓にして、勾麗と離して考ふべきものなること明なり。然れども上記の諸書に擧げたる高氏の解釋は、いづれも附會の説にして、これも亦貂族の謂なり。その理由は、魏志東夷傳に「又有小水貂、勾麗作國、依大水而居、西安平縣北有小水、南流入海、勾麗別種依小水作國、因名之爲小水貂」とあり。後漢書には「勾驪一名貂耳」と見え、たれば、高勾麗が貂族の一種なることは更に論なきのみならず、本邦に歸化せる高勾麗人は皆、貂(一)に貂に作る(氏)を姓としたれば、その姓高朝鮮音(ko)は恰も paktar (百濟)が kutar となりたる如く、pak (貂)の上略せられて ko となりたるものなるべし、而して高姓を除きたる殘餘の勾麗 (ku-ryō) は、朝鮮古地名に最も普通なるものにして、加羅 (ka-ra) 古離 (ko-ri) 狗盧 (ku-ro) 溝婁 (ku-lu) 忽 (kor) の類甚多く、且魏志高勾麗傳に「溝婁者勾麗名城也」と見えても、と城塞の義なれば、高勾麗 (ko-ku-ryō) は貂族の城塞即ち貂國の謂なり。然らば我國史に於て高麗を コマ と訓ずるは如何、このことにつきては既に専門諸家の説あ

れども、いまだ全く世人の意を満すべきものあらざるが如し。依てこゝに新たなる一種の見解を下さんに、高勾麗人はもと貉族なるが故に、其本國が高(高麗)の上略(上略)氏を姓とし、百濟が百(百濟)を國號とせると同じく、我國に投じ來れるものは其族名貉(貉)を姓とせるものなれども、これを其儘(百濟)と稱へては如何にも日本化せざる感あり。因てこれを訓讀せるものならん。外國の姓氏を自國化せることにつきては、その他にも例あり。小野妹子が唐に使せしとき、唐國が彼を蘇因高と呼びたるは、小野の小を音讀し、これに妹子の音を加へ、唐様に姓名を三字に約めたるものにして、これと同じく三韓の歸化人も、その姓を皇國風に改めたるものありて、高麗國人多高王の後裔は姓を高田といひ、任那の吉師(宰の義)の苗裔を吉田といへり。

貉をコマといふも亦これと同例にして、宮崎博士の所謂字註訓といふものなるべし。字註訓とは漢字を其字註により和譯せるものにして、字書に「銅徒東切赤金也」とある赤金を譯して、銅をアカガネといひ、銀語巾切爾雅白金謂之銀」とあるより、銀をシロガネと名づくる類なり。コマは日本紀に貉と書し、集解には貉と改む。貉、猶とも、貉の略體にして、貉は説文に貉と書き、また貉に作る。説文段註に「貉莫白切、字亦作貉、亦作貉」、「貉讀爲十百之百」と見え、たれば、貉、貉は相通じて用ひられたるものと知らる。さてその字註を見る



に、説文に「貌似熊而黃黑色」新撰字鏡に「貌類、白豹也、似熊黃黑色、全韻玉篇に「類獸名似熊」などとありて、いづれもこれを熊の如き獸と釋きたれば、もし「類」字を訓せば「國語 kuma (熊)」、朝鮮語 kcm (熊)とするの外なし。故に「豹」を「マ」といふは、その昔歸化の韓人がその「類」の出なるがため「豹」を姓とし、これを訓讀して「マ」といひしを、遂にその國名にまで及びして高麗をも「マ」と稱するに至りしものなるべし。

七

新羅の始祖の朴(朝鮮音 *pa*)氏なること、及び其大輔に瓠(朝鮮訓 *pa*)公ありしことは既に前節に述べたり。この朴姓の起原に就きては、從來いまだ何等の説あるを聞かずと雖も、上來述べ來りたる論旨より推していはゞ、既に記録上より新羅が百濟と同種同語なりしこと察するに難からず。師古の説にも「貉在東北方、三韓之屬、皆貉屬なり」とあれば、新羅も亦もと「類」族より出て、始祖が朴( *pa*)氏を姓としたるは、その種族名を探りたるなりと斷ずるも敢て不可なからん。「類」族の名は頗る古く、周禮に「九貉五戎六狄」といひ、論語に「蠻貊之邦」といふ。往古支那の東北に住みたる強族にして、小水「類」梁「類」等の小別ありて、かの扶餘、沃沮等も亦この種族中より出てたり。もし上述の研究にして大過なからんには、

高句麗・百濟新羅も同じくこの種族より出て、百濟 (pak-tara)、高句麗 (pak-kuryo) 二國の名及び朴 (pak)、狛 (pak) の兩姓に、永く其種族名を留めたるものにして、半島の民族はこの類人種の南下せるものと斷ずべきなり。

## 八

朝鮮民族の由來するところは略これを知り得たりとすとも、その上古に於ける我國との關係に至つては更に一層研鑽の功を積まずんば、輕々にこれを論ずべからず。然れども今日に至るまでに日本朝鮮兩語の組織を調査したるところによれば、この兩語の根本に共同の點あることは斷乎として疑を容るべからざるものがあるが故に、兩國土間にも亦必ず相當の連絡はありたるものと想像せらる。今日鮮古代の地名を検して、本問題の解決に資するところあらんと欲す。

朝鮮の古地名中には伐 (poi)、忽 (古音 koi)、支 (古音 ei)、斯只 (set-i) 等と類音の語尾を有するもの頗る多し。これ等は都邑若しくは城塞の義ある三韓の古語にして、我國の古言と等しく相通ずるのみならず、我古地名中にも屢散見するところなり。以下逐次兩者を對照して、その同一起原より出でたることを證せんとす。

(一) プルと類似音の語尾を有するもの

新羅は初めその國號を徐耶伐(syo-ri-pōr)といひ、一に徐那伐に作り、又徐羅伐とす。我國史に新羅をシラギと訓めるそのシラは、徐羅の音譯にして、キは伐(pōr)の義譯なり。即ち伐(pōr)は國語城(ᄃᆞᆯ)に該當する三韓の古語にして、地名の終に加へて城邑の義を表せるものと知らる。而してこれ等の地名を寫すに用ひられたる漢字は、恰も我萬葉假名の如く、その音訓ともに使用せられたること次に示すが如し。

古莫夫里 (ko-mak-pu-ri) 「夫里」の音

卑離 (pi-ri) 「卑離」の音

不離 (pu-ri) 「不離」の音

草八 (chho-phar) 「八」の音

肖利巴利 (syo-ri-pha-ri) 「巴利」の音

頗利 (pha-ri) 「頗利」の音

仇火 (ku-pur) 「火」の訓

多伐 (ta-pōr) 「伐」の音

戎發 (kyōi-par) 「發」の音

この他日本紀に比利阿夫羅など見えたる韓地名は皆この類なり。而してp音の轉じてw音となり、遂に脱落することあるは、朝鮮語の音韻上屢見るところの現象にして、このpörも亦日本紀に見えたる草羅城の場合にはwaraと轉訛せり。さればかの阿羅(ara)徐羅(stōra)駕洛(ka-ra)馴盧(sōro)楚離(chōri)等三韓の古地名に普通なるラリの語尾は、このpörの省略せられたるものと觀察せらる。

朝鮮語 pör(城邑)に對する我國の古言はフレにして、大和の地名石村は即ちその一例なり。

萬葉三 角障經石村毛不過泊瀬山何時毛將超夜者深去通都

日本紀に「大軍集滿於其地、因改號爲磐余」と見えたれども、これは地名に關する例の俗傳にして探るに足らず。石村はイハフレの約にして、神武天皇の御名を神日本磐余彥尊と申し奉るも、またこの村の名に因めるものなり。而して國語ハ行の古音がp音なりとは、學界の定説なれば、村の古音はpureにして、朝鮮語 pör(村)と一致す。このフレのフ音もw音に轉じ、また遂に脱落すること朝鮮に於けると全く相同じ。山城の地名考羅の起原を、古事記には「以鈎探其沈處者、繫其衣中甲、而訶和羅鳴故號其地謂訶和羅前」と説きたるより推せば、もとカワラと呼びしものにして、この地後に河原と呼べば、kaura, kawara, ka-

hara 相通じたることを知るべし。且地名を寫せる漢字の用法に音訓相交はりたることも朝鮮と同様にして、豊前の地名河原 (ka-hara) を萬葉集には革流 (ka-haru) 和名抄には香春 (ka-haru) と書きたれば、地名の起原を論ずる場合にこれに當てたる文字の意義に拘泥すべからざることも亦明かなり。

この故に振 (大和) 比良 (近江) の如き地名は勿論、權原 (大和) 名張 (伊賀) 直入 (豊後) などを始め、由良 (紀伊) 奈良 (大和) 等も盡く村の古言フレより出で、朝鮮の古語 por (村) と同語なるを知るべし。今この類に屬する地名を和名抄中より抜き出せば、大約下に擧ぐるところの如くにして、その數決して尠からず。

原 (hara)

波良 (hara)

幡羅 (hara)

布留 (huru)

庇羅 (hira)

大原 (oho-hara)

桑原 (kuha-hara)

高原 (taka-hara)

柏原 (kasaha-hara)

葛原 (katsura-hara)

節原 (husi-hara)

篠原 (sino-hara)

荏原 (e-hara)

姫原 (hime-hara)

吉原 (yosi-hara)

笑原 (no-hara)

井原 (wi-no-hara)

榛原 (hai-hara)

大原 (oho-hara)

麻原 (wo-hara)

栗原 (kuri-hara)

檜原 (hara-hara)	神原 (kam-hara)	草原 (kusa-hara)
田原 (ta-hara)	八原 (ya-hara)	御原 (mi-hara)
蒲原 (kamu-hara)	葦原 (asi-hara)	藁原 (hai-hara)
石原 (isi-hara)	櫛原 (ichi-hara)	三原 (mi-hara)
市原 (ichi-hara)	廬原 (iho-hara)	茅原 (chi-hara)
尾張 (wo-hara)	名張 (na-hara)	鹿蒜 (ka-hira)
畔蒜 (a-hira)	畔治 (a-haru)	新治 (nini-hari)
直入 (na-hori)	合良 (ka-hara)	甲良 (ka-hara)
氷蛭 (hi-hiru)	揖理 (i-hiru)	香春 (ka-haru)
始羅 (a-hira)	知夫利 (chi-haru)	給黎 (ki-hira)
早良 (sa-wara)	始藹 (a-hira)	和良 (wara)
多良 (ta-ra)	安良 (a-ra)	那羅 (na-ra)
宇良 (u-ra)	由良 (yu-ra)	讚良 (sara-ra)

この中直入<sup>ナホリ</sup>を昔者郡東垂水村有桑生<sup>ハハ</sup>之其高極陵枝幹直美俗曰直生村後人改曰直入郡是也(豐後風土記)甲良<sup>カハラ</sup>を厩戸皇子造四天王寺始製瓦于神崎郡瓦屋寺村或瓦工所居邪

(玉林抄)名張を「古語隱を奈婆留といふ、山巒四匝郡其中に在り、故にこれを名づく」古事記傳と説けり。古の地名起原説概ねこの類なり、採るに足らず。安良は阿羅人、讚良は沙羅羅人の歸化移殖せし地なり、因て名づく。

(二) コルと類似音の語尾を有するもの

また朝鮮の古地名に加羅 (ka-ra)、古離 (ko-ri)、狗盧 (ku-ro)、溝漣 (ku-ru) などコルと音の類せるもの多く、日本紀にも任那の地名己叱己利あり。魏志に溝漣 (ku-ru) は高句麗語にて城の義なるよし見え、新羅の地名冠文 (ka-s-kur) を冠山縣と改めたる例あれば、これも亦 *po-* (村)と同じく、城塞即ち村邑の古語なること明なり。而してこの地名を寫せる漢字も音訓相交りて一様ならず。上記の外なほ次の如きものあり。

召 文 (syo-ktir) 「文」の訓

買 忽 (mai-kor) 「忽」の古音

八居里 (phar-ko-ri) 「居里」の音

加利 (ka-ri) 「加利」の音

梁骨 (yang-kor) 「骨」の音

賓屈 (pin-kur) 「屈」の音

而して新羅が仇火 (ku-pur) を高丘縣逢句火 (tar-ku-pur) を大丘縣と改め、北史百濟傳にその都を固拔 (ko-par) と名づく」と記し、日本紀にも熊備己富理 (yubi-kohori) 背許の名見えなれば、朝鮮に ku-por と音の類せる地名ありしことは著しく、その義の大村 (khu-por) なることも亦殆ど疑なし。我國語にて今日も郡をコホリと訓ずるは、即ちこの khu-por と同語にて「大村」の義なるべく、朝鮮にては P 音脱落して郡を ko-ur と呼べり。なれば上記の コル と音の類せる地名も亦 ku-pur の省略にして、等しく大村 (khu-por) の義に解すべし。我國の地名中にもこれと音の類せるもの頗る多く、例へば輕 (カキ) 相樂 (サガ) 伎人 (ヘ) 内 (ナ) 長柄 (ナガテ) 羅津 (ワカヅ) 勾 (カキ) 大和 (ヤマト) 葉栗 (ハヅリ) 尾懸 (ビヅリ) 等いづれも朝鮮地名中の コル と比較すべきものにして、大村 (ko-hure) の轉訛せしものと信ぜらる。左に和名抄中よりこれと音の類せるものを擧げて、この地名が本邦の大部分に分布せることを示さん。

韓良 (kara)

久利 (kuri)

託羅 (ta-ara)

長柄 (na-gara)

足柄 (asi-gara)

相樂 (sa-gara)

望理 (ma-gari)

柴刈 (siba-kari)

利刈 (to-gari)

菱刈 (hisi-kari)

新座 (mhi-kura)

高座 (taka-kura)

大藏 (oho-kura)

朝倉 (asa-kura)

和倉 (wa-kura)



金倉 (kana-*kuwa*)

大倉 (oho-*kuwa*)

小倉 (wo-*kuwa*)

長倉 (naga-*kuwa*)

永倉 (naga-*kuwa*)

蓼倉 (tade-*kuwa*)

鎌倉 (kama-*kuwa*)

福留 (fu-*kuwa*)

福良 (fu-*kuwa*)

鮎浦 (nu-*kuwa*)

平群 (he-*kuwa*)

千栗 (chi-*kuwa*)

升栗 (masu-*kuwa*)

横栗 (yo-*kuwa*)

若栗 (wa-*kuwa*)

羽栗 (ha-*kuwa*)

殖栗 (we-*kuwa*)

葉栗 (ha-*kuwa*)

勇禮 (i-*kuwa*)

給理 (ko-*kuwa*)

氣良 (ke-*wa*)

千柄 (chi-*kuwa*)

(三) キ・シキと音の類せる語尾を有するもの。

朝鮮の古地名中にまたキ・シキと音の類せるもの多し。例へば達己 (tar-*kuji*)、數令 (yō-*kuji*)、熊只 (ung-*ki*)、斤鳥支 (kin-o-*ki*)、玉岐 (ok-*ki*)、阿尸令 (a-si-*hyōji*)、多斯只 (ta-saki)、伐首只 (pō-*syuki*) の如く、また日本紀中の朝鮮地名にも斯二岐布彌支、沙鼻岐、枕服岐、都久斯岐、伊斯积、牟雌积等あり。このキ・シキの語原も亦都城山塞の義にして、新羅にて改稱せし新舊地名を比較するに、左の如く

闕城 本闕 支 (kuō-*ki*)

悅城 本 悅 只 (yōr-ki)

潔城 本 結 己 (kyōr-ki)

儒城 本 奴斯只 (no-sāki)

いづれもこれを城と改めたり。日本紀にも朝鮮地名に意流村あり、辟支山あり、百濟の地名州流須岐を天智紀に州柔城と記せるなど、其例證多し。

國語に於ても亦城をキ又シキと訓じ、塹壕を穿ち、壘壁を繞らしたる防備地を表せり。牧

(馬城) 檜(人城) 塹堀城 柵のキ、塞壘防守のサキソコは即ちこの義にして、沖繩にて城を *su-ki*

*suku* といふも、亦同語なり。蓋し往古の都邑は一種の避難所にして、必ずこれを高地に設

け、又は壘壁を繞らしたることは言語の上で徹して知るべく、英語 town (町) はもと墻壁

の義にして、露語 *ostrog* (市) の原義も亦柵なり。我國に於ける往時の皇都はいづれも此種の

防備ありたるものなれば、都の名にも瑞籬宮あり、柴籬宮あり、廣く稱し百敷大宮といふ。

磯城に都を遷されたるは崇神、欽明の二朝なれど、志藝、山津見、神敷山主、大倭、日子鉏、友命、

阿遲、鉏高日子根、神師、木津日子命、豊城入彦、命、湍名城入姫、命等の御名の中に、キシキの見

えたるは都城を領したまへるよりの美稱にして、往古よりキシキの存在せし證とすべ

く、敷島が大和國の冠辭より轉じて、我帝國の別號となれるも亦故ありといふべし。

さればキ・シキは日鮮共通の古語にして、都城の義あるものと知らる。新羅を訓じてシラギといひ、相樂を古くサガラキといふは地名の下にキ(城)を加へたるものにして、左記の如き類音の地名も亦これと同例なり。

訓覇(伊勢)……………訓覓(安藝)

宇佐(豊前)……………臼杵(豊後)

この他、土岐(美濃)綴喜(山城)能義(山雲)多藝(美濃)多胡(上野)日置(安房)志紀(河内)安食(近江)三次(安房)散吉(大和)須可(下總)宿久(攝津)周积(丹後)益城(肥後)など甚多く、前例に準じて和名抄より類音の地名を擧ぐれば左の如し。

紀伊 (ki)

結城 (yuhu-ki)

茨城 (ubara-ki)

荒城 (ara-ki)

磐城 (iha-ki)

宮城 (miya-ki)

頸城 (kubi-ki)

小城 (wo-gi)

高城 (taka-ki)

新城 (nhi-ki)

鹿城 (kara-ko)

阪城 (saka-ki)

罵城 (to-ki)

野城 (no-gi)

石城 (iha-ki)

三城 (mitsu-ki)

大城 (oho-ki)

三木 (mi-ki)

八木 (ya-gi)

春木 (haru-ki)

沼木 (nu-ki)

多木 (ta-kei)

荒木 (ara-kei)

甘木 (ama-kei)

眞木 (ma-kei)

與木 (yo-kei)

葛木 (katsura-gi)

青木 (awo-kei)

殖木 (uwe-kei)

玉置 (tama-kei)

日置 (he-kei)

栗垣 (kuri-kahe-kei)

小垣 (wo-kahe-kei)

伊氣 (i-kei)

阿氣 (a-kei)

後月 (sitsu-kei)

密月 (mitsu-kei)

秋月 (akitsu-kei)

綴喜 (tsutsu-kei)

久喜 (ku-kei)

訓覓 (kurube-kei)

土岐 (to-kei)

讚岐 (sanu-kei)

刀岐 (to-kei)

宇岐 (u-kei)

安伎 (a-kei)

把伎 (ha-kei)

阿岐 (a-kei)

能解 (no-ge)

養宜 (ya-gi)

御調 (mitsu-kei)

等力 (tojoro-kei)

佐伯 (sahe-kei)

新羅 (sira-gi)

熊來 (kuma-kei)

彼杵 (sono-kei)

臼杵 (usu-kei)

美囊 (mina-gi)

久良 (kura-gi)

眞良 (sira-gi)

奄藝 (amu-kei)

多藝 (ta-kei)

安藝 (a-kei)

合藝 (kamu-kei)

能藝 (no-gi)

多紀 (ta-kei)

那紀 (na-ki)

能義 (no-gi)

鳥拔 (simanu-ki)

散吉 (sanu-ki)

法吉 (hoho-ki)

有只 (u-ki)

口枳 (kuchi-ki)

志樂 (sira-gi)

邑樂 (ohara-gi)

多伏 (tanu-ki)

伊筑 (itsu-ki)

杵築 (kitsu-ki)

餘綾 (yoro-gi)

肝屬 (kimotsu-ki)

養耆 (ya-ki)

比企 (hi-ki)

都賀 (tsu-ga)

英賀 (a-ga)

甲賀 (kahu-ka)

芳賀 (ha-ga)

敦賀 (tsuru-ga)

宇賀 (u-ga)

安賀 (a-ga)

多賀 (ta-ga)

相可 (ahu-ka)

多可 (ta-ka)

奴可 (nu-ka)

阿我 (a-ga)

伊可 (i-ka)

田可 (ta-ka)

平鹿 (hira-ka)

山鹿 (yama-ka)

秋鹿 (ai-ka)

山香 (yama-ka)

伊香 (ika-ka)

有鹿 (ari-ka)

玖珂 (ku-ka)

津高 (tsuta-ka)

多珂 (ta-ka)

篠東 (sinotsu-ka)

狹東 (satsu-ka)

小高 (wota-ka)

杵束 (kitsu-ka)

飯高 (ihita-ka)

兔束 (totsu-ka)

朝來 (asa-ko)

邑久 (o-ku)

和人 (wa-ku)

夜久 (ya-ku)

多久 (ta-ku)

伊具 (i-ku)

和具 (wa-ku)

多具 (ta-ku)

紺口 (komin-ku)

熊毛 (kuma-ge)

三毛 (mi-ke)

大毛 (oho-ke)

多氣 (ta-ke)

益氣 (ya-ke)

和氣 (wa-ke)

都氣 (tsu-ke)

都介 (tsu-ke)

佐竹 (sata-ke)

且來 (asa-ko)

今己 (ko-ko)

多胡 (ta-ko)

英虞 (a-ko)

伊香 (ika-go)

愛宕 (ata-go)

賀古 (ka-ko)

佐我 (saga)

佐嘉 (saka)

佐賀 (saga)

志木 (siki)

佐紀 (saki)

志紀 (siki)

周积 (suki)

周吉 (suki)

城 (siki)

佐久 (saku)

須加 (suka)

佐加 (saka)

須可 (suka)

指賀 (siga)

滋賀 (siga)

佐香 (saka)

宗我 (soga)

宗賀 (soga)

神前 (kan-saki)

山前 (yama-saki)

松前 (matsu-saki)	宮崎 (miya-saki)	城崎 (ki-no-saki)
山崎 (yama-saki)	益城 (ma-siki)	安來 (ya-suki)
揖宿 (ibu-suki)	渚鋤 (su-suki)	三次 (mi-suki)
來次 (ki-suki)	湯次 (yu-suki)	安食 (a-siki)
明敷 (aka-siki)	美敷 (mi-siki)	布敷 (nuno-siki)
小塞 (wo-seki)	出鹿 (idsu-sika)	刺鹿 (sa-suka)
鈴鹿 (su-suka)	杜鹿 (wo-sika)	安宿 (a-suka)
春日 (ka-suga)	安積 (a-saka)	葛飾 (katsu-sika)
八坂 (ya-saka)	鳥坂 (to-saka)	上坂 (kami-saka)
小坂 (wo-saka)	大坂 (oho-saka)	三坂 (mi-saka)
赤坂 (aka-saka)	高坂 (taka-saka)	八坂 (ya-saka)
石加 (i-sika)	伊作 (i-saku)	針折 (hari-saku)
徳宿 (toko-saku)	朝明 (a-sake)	

以上述べ來りたるところによりて、國語フレ及びその略レは村、カフレ及びその略カラ  
 は大村、キ及びビシキは城の義にして、朝鮮語 pur 及びその略 ra (村) ko-pur 及びその略

Kor (大村) 'ki 及び siki (城) と共同の根源を有し、而もこの同一語原に屬する地名が本邦及び朝鮮半島に基布せることを明にしたり。それ地名は永くその土地に固定すべき性質を有し、他の事物が時代を追うて轉變すると自ら趣を異にす。故にオトクニを墮國弟國之訓、ツ、キを筒城、大筒、木管、木綴、喜シキを志紀、磯木師、木城、ミケを御木三毛三池と書くなど、時によりて用字こそ異なれ、その稱呼は依然として舊に従へり。新羅高句麗百濟各王朝を異にしたる場合も亦概ね然り。されば上古民族の移動及び相互の交渉等につきては、記録以外にこれを地名の研究に求むべきもの多し。本論文が先づ特に日鮮の地名をその研究の題目とせるはこれがためのみ。

最後に本論文の要旨を重ねて陳述すべし。古來朝鮮半島に國するもの決して尠からず。檀君の傳説、箕子の朝鮮は姑く措き、北來の種族に高句麗、百濟あり、沃沮あり、濊貊あり。南方には早くより韓種族ありて、馬韓、辰韓、弁韓に小分し、馬韓は五十四國、辰韓は十二國、弁韓は十二國を數ふ。別にまた駕洛國ありて、五部に分れ、就中大加耶は日本紀に任那と稱するものにして、永く我朝の内官家たり。これ等の諸國雜然として相交り、治亂興亡相續ぎたれど、載籍闕略し、今に於てその根本的關係を知らんとすれど、茫乎として影を捉へんとするに似たり。然れども茲に千古不滅の言語あり。超然として邦家興廢の外に立ち、



水火も亦これを滅し難く、口々に傳へて隠れたる史實を今に遺せり。本篇は先づ百濟が初め *pak-tara* と呼ばれ、我國にてクダラといふはその略稱なること、及び高句麗の舊稱も亦 *pak-kuryō* なることを説き、これ等の國名に *pak* 音の冠せられたるは、新羅の始祖の姓朴 (*pak*) 氏と共に、本來緬 (*pak*) 人種の出なるがためなりと論じ、次に *pur* (村) *kor* (大村) *tu* (城) 等はいづれも日鮮共通の古語にして、而もこれ等は日本朝鮮の古地名中に夥しく散見するところなれば、往古より兩土の住民に離るべからざる關係ありと斷じたるものなり。然れども本調査はいまだ完了せざる部分あり、加ふるに菲才短見、例證とせる地名の如きは、特に改削すべきもの多かるべしと信ず。

明治四十五年六月十七日印刷  
明治四十五年六月二十日發行

# 朝鮮總督府

印刷所 三省堂印刷部

東京市神田區三階河岸十二號地

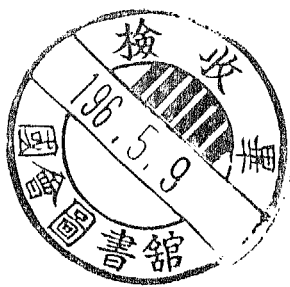
UNTERSUCHUNGEN  
ÜBER  
DIE JAPANISCHEN UND KOREANISCHEN ORTSNAMEN  
IN ALTEN ZEITEN.

VON

S. KANAZAWA, *BUNGAKEHAKUSHI.*

GENERALGOUVERNEMENT CHŌSEN.

1912



UNTERSUCHUNGEN  
ÜBER  
DIE JAPANISCHEN UND KOREANISCHEN ORTSNAMEN  
IN ALTEN ZEITEN.

VON

S. KANAZAWA, *BUNGAKUJAKUSHI.*

GENERALGOUVERNEMENT CHŌSEN.

**1912**

## I.

Die älteste Geschichte von der koreanischen Halbinsel ist in Dunkel gehüllt. Einerseits herrschte einst im nördlichen Korea ein Chinese Chi-tzu (箕子) aus der YIN (殷)-Dynastie. Sein 40. Abkömmling Chi-chun (箕準) wurde von einem Wei-man (衛滿) aus der YEN (燕)-Dynastie verdrängt, worauf dieser die Herrschaft des nördlichen Koreas übernahm. Sein 3. Nachkomme wurde aber vom Kaiser Wu-ti (武帝) aus der HAN (漢)-Dynastie vernichtet; die HAN-Dynastie herrschte dort, indem die Ortschaften 4 Kreisen zugeteilt wurden. Andererseits bewohnte Südkorea seit längerer Zeit die HAN (韓)-Rasse. Da unterschied man drei Länder: Mahan (馬韓), Sin-han (辰韓) und Pyön-han (弁韓), welche man mit dem Gesamtnamen SAM-HAN d.h. die 3 HAN zusammenzufassen pflegte. Später wanderten aus der Pu-yö (扶餘)-Rasse, die im Norden Chinas wohnte, die Volksstämme Päk-chyöi (百濟) und Ko-ku-ryö (高句麗) nacheinander nach Süden hin, wo jedes von ihnen einen Staat gründete. Ferner entstand aus dem Volk von Sin-han (辰韓) der Staat Silla (新羅). Diese drei Länder lagen untereinander in beständigem Kampfe, bis zuletzt Silla die ganze Halbinsel unter seine Herrschaft brachte. Sodann herrschte die Ko-ryö (高麗)-Dynastie. Nachdem die Herrschaft weiterhin noch auf andere Dynastien der Reihe nach übergegangen war, erreichte die Halbinsel von Korea den gegenwärtigen Zustand.

Das obige sind nur die allgemeinen Grundzüge der Geschichte über die Entstehung und den Niedergang der

Länder auf der koreanischen Halbinsel. Da aber das geschichtliche Material grösstenteils verloren gegangen ist, so kann man über die Vergangenheit Koreas nur durch die in Japan und China vorhandenen Schriftstücke eine Anschauung gewinnen. Nähere Aufschlüsse darüber sind von zukünftigen Studien noch zu erhoffen.

In der vorliegenden Abhandlung haben wir uns die Aufgabe gestellt den Erweis zu erbringen, dass die alten Ortsnamen von Japan und Korea zu einander in ganz enger Beziehung stehen, indem wir für die Auffassung, dass das Volk von Silla (新羅), das zu der HAN (韓)-Rasse gehört, sowie das Volk von Päk-chyöi (百濟) und das Volk von Ko-ku-ryö (高句麗), welche beide aus der Pu-yö (扶餘)-Rasse herrühren, alle drei aus der Pak-Rasse (狃=alter Aussprache nach: *pak*) abstammen, sowie dass die Einwohner von Korea grösstenteils die Völker sind, die einst im Norden Chinas wohnten und allmählich nach Süden wanderten, von dem etymologischen Standpunkt aus den Beweis erbringen.

## II.

Chyu-mong (朱蒙), der Gründer der Dynastie Ko-ku-ryö (高句麗) war ein Flüchtling aus der Pu-yö (扶餘)-Rasse; On-cho (溫祚), der Ahnvater der Dynastie Päk-chyöi (百濟) war der zweite Sohn des Chu-mong. Es unterliegt demnach keinem Zweifel, dass diese beiden aus der Pu-yö (扶餘)-Rasse abstammten. In einem dem chinesischen Kaiser aus der Dynastie WEI (魏) überreichten Briefe des päk-chyöiischen Kaisers Yö-kyöng (余慶) ist klar erwähnt, dass das Volk von Päk-chyöi (百濟) wie das von Ko-ku-ryö (高句麗) aus der Pu-yö

(扶餘)-Rasse abstammten. Der Kaiser Syöng-oang (聖王) von Päk-chyöi nannte das Land Süd-Puyö (南扶餘), nachdem die Hauptstadt nach Sä-cha (泗水) verlegt worden war. Ferner lautet der Familienname des päk-chyöiischen Kaisers Yö (余). Auch sind im « Nihon-shoki »<sup>1)</sup> die Zeichen 百濟 und 扶餘 ebenfalls *Kudara* ausgesprochen. Alles dieses beweist zur Genüge, dass die Völker von Ko-ku-ryö und Päk-chyöi aus der Pu-yö (扶餘)-Rasse herrührten. Weiterhin ist in dem chinesischen Geschichtswerke « Wei-chih » (魏志) erwähnt, dass die Sprache und Sitte von Ko-ku-ryö und Pu-yö gleich wären; auch lässt das Geschichtswerk « Wei-shu » (魏書) keinen Zweifel über die Abstammung des Volkes von Ko-ku-ryö aus der Pu-yö (扶餘)-Rasse.

Was ferner das Land Silla anbetrifft, so steht in dem chinesischen Geschichtswerke « Sui-shu » (隋書), dass der Kaiser des Landes Silla aus Päk-chyöi stammte, derselbe, welcher nach dem Land Silla flüchtete, wo er auf den Thron stieg. Und in einem Geschichtswerke « Nan-shih » (南史) findet sich die Angabe, dass Silla erst nach der Verdolmetschung durch Päk-chyöi mit China verkehren konnte. Hieraus lässt sich ersehen, dass zwischen Silla und Päk-chyöi gewisse Stammesbeziehungen bestanden haben. Auch hatten die Völker von Pyön-han (弁韓) und Ma-han (馬韓) gemeinsame Wohnsitze inne; Sprachen und Sitten der beiden Völker waren folglich sehr ähnlich. So ist man wohl zu der Annahme berechtigt, dass die HAN (韓)-Rasse im Süden und die Pu-yö (扶餘)-Rasse im Norden gleicher Abstammung und Sprache gewesen sind.

<sup>1)</sup> eines der ältesten Geschichtswerke Japans. (720 n.C.).



### III.

Für die obige Tatsache kann man auch vom sprachlichen Standpunkt aus den Nachweis erbringen.

Die meisten Völker im Orient und Okzident geben über die Richtung ihrer Wanderungen in ihren Sprachen Hinweise. Das sanskritische *pârva* (Osten) beispielsweise bedeutet vorn, *apara* (Westen) hinten, *dakshina* (Süden) rechts und *savya* (Norden) links. Dies beweist uns die Tatsache, dass die arischen Völker von Westen nach Osten wanderten. Ebenso bedeutet das chinesische Zeichen 北 (Norden) Rückseite, wodurch wir beweisen können, dass die HAN (漢)-Rasse von Norden nach Süden vorrückte.

Ko-ku-ryō (高句麗) wurde in 5 Abteilungen eingeteilt: 1) die innere oder gelbe Abteilung (黃部), 2) die nördliche oder hintere Abteilung (後部), 3) die östliche oder linke Abteilung (左部), 4) die südliche oder vordere Abteilung (前部) und 5) die westliche oder rechte Abteilung (右部). Aus obigem ergibt sich für uns die deutliche Tatsache, dass das Volk von Ko-ku-ryō von Norden nach Süden einzog. Ausserdem finden wir im « Nihon-shoki » den Landesnamen 南加羅 statt *minami-kara* (Süd-Kara) *arihisi-no-kara* geschrieben, worin das Element *arihi* dem alten Koreanischen *arp* gleicht, das dem heutigen Koreanischen *ap* entspricht und ebenfalls *vorn* bedeutet. Ferner werden in Korea die im Süden befindlichen drei Provinzen (遺=to) Kyōng-syang (慶尙), Chyōl-la (全羅) und Chhyung-chhyōng (忠清) *ap-to* d. h. 前道 (wörtlich: vordere Provinzen) genannt. Und weiterhin im

« Ryong-pi-ö-chhyön-ka » (龍飛御天歌)<sup>1</sup> ist das Zeichen . 北 (Norden) *tui* (hinten) ausgesprochen. Auch heisst im Koreanischen vorn und hinten an einem Schädel *Süden und Norden*. Alles dieses reicht hin, die Tatsache zu beweisen, dass die Völkerschaften Koreas von Norden nach Süden einzogen.

#### IV.

Nunmehr bleibt uns zu beweisen, dass die Völker der drei Länder Päk-chyöi, Ko-ku-ryö und Silla aus der ursprünglich im Norden wohnhaften Pak-Rasse abstammten.

Als Namen für das Land Päk-chyöi bediente man sich in den Geschichtswerken « Wei-chih » (魏志), « Hou-han-shu » (後漢書) usw. des Zeichens 伯濟 und auf dem Denkmal des kokuryöischen Kaisers Ho-thai-oang (好太王) des Charakters 百濟. Die Zeichen 伯濟 werden im heutigen Koreanischen *Päk-chyöi* ausgesprochen. Wir müssen aber zunächst erwägen, wie man dieselben in alten Zeiten aussprach. Unter den alten Ortsnamen von Korea finden sich nicht wenige, die sehr schwer auszusprechen sind, da solche bald nach chinesischer, bald nach koreanischer Leseart gegeben zu werden pflegen. Z. Z. des sillaischen Kaisers Kyöng-tök-oang (景德王) wurden für die alten Ortsnamen andere Zeichen eingesetzt, denen meistens ähnliche Laute entsprechen. Vergleicht man daher die früheren Zeichen der Ortsnamen mit den Neugesetzten, so erhält man einen ungefähren Begriff von der Verwendung chinesischer Zeichen bei den

<sup>1</sup>) die älteste koreanische Gedichtssammlung, die zum erstenmal in koreanischen Schriftzeichen abgefasst worden ist. (1445 n. C.)

koreanischen Ortsnamen in alten Zeiten. Nun, der Ersatz der Zeichen bei den Ortsnamen kann auf etwa 4 verschiedene Arten erfolgen :

1) Ortsnamen, welche mit neuen Zeichen versehen wurden, die mit den früheren ähnliche Aussprache und zwar angenehmere Bedeutung haben. Z. B. die Ortsnamen *Sim-pha*, das früher mit 深巴 bezeichnet worden war und *Chyök-ri*, wofür früher die Zeichen 赤里 gegolten haben, wurden mit den Zeichen 眞寶 (*Chin-po*: 眞 = Wahrheit, 寶 = Schatz) resp. 積利 (*Chyök-ri*: 積 = anhäufen, 利 = Gewinn, Vorteil, Zinsen etc.) versehen. Dies war auch in Japan der Fall; z. Z. der Kaiserin Gemmyo (708—714 n. C.) wurden im Laufe der Jahre Wadō die Zeichen für den Namen der Provinzen durch zwei neue Zeichen, die bessere Bedeutung haben, vertauscht.

2) Ortsnamen, welche früher mit chinesischen Zeichen, die eine der koreanischen Leseart der betreffenden Ortsnamen entsprechende Aussprache haben, bezeichnet worden waren, wurden mit den der Bedeutung derselben entsprechenden zwei Zeichen versehen. Z. B. die Ortsnamen *O-sä ham-tar* und *Ko-sä-kar-i*, für welche die Zeichen 烏斯舍遜 resp. 高思曷伊 verwendet worden waren, wurden in neuerer Zeit resp. mit 兔山 und 冠文 bezeichnet. Bei dem ersteren ist *Osäham* das alte Wort für Hase (兔) und *tar* das alte Wort für Berg (山); dies bedeutet nämlich wörtlich Hasen-Berg. Bei dem letzteren entspricht das Koreanische *kas* dem Chinesischen 冠 (Krone, Kappe) und dem Chinesischen 文 (Verzierung, Schrift u. dergl.) das Koreanische *kür*. Da nun *Kosäkari* und *Kaskür* eine sehr ähnliche Aussprache haben und das letztere mit zwei chinesischen Zeichen be-

zeichnet werden kann, so wurde der Ortsname *Kosäkari* in 冠文 anstatt 高恩葛伊 geändert.

3) Ortsnamen, deren koreanische Leseart mit entsprechenden chinesischen Zeichen ausgedrückt worden war, wurden in andere chinesische Zeichen wörtlich übertragen. Z. B. der Ortsname 阿火屋 (*a-pur-ok*) wurde in 比屋 umgesetzt. Das chinesische Zeichen 火 (Feuer) entspricht dem Koreanischen *pur*, das chinesische Zeichen 比 (Vergleichung) entspricht dem Koreanischen *aor*; 阿火 (*a-pur*) und 比 (*aor*) werden sehr ähnlich ausgesprochen. So wurde anstatt 阿火屋, die neue Schreibung 比屋 angenommen, die ebenfalls mit zwei chinesischen Zeichen ausgedrückt werden kann.

4) Ortsnamen, deren koreanische Leseart mit entsprechenden chinesischen Zeichen ausgedrückt worden war, wurden mit anderen chinesischen Zeichen aussprachlich übertragen. Z. B. der Ortsname 推浦 (*Mir-pho*) wurde in 密津 und 毋山 (*Öm-san*) in 雲峰 verwandelt. Das chinesische Zeichen 推 entspricht dem Koreanischen *mir*, das chinesische Zeichen 毋 dem Koreanischen *ömi*; hierfür wurden die chinesischen Zeichen resp. 密, welches die Aussprache *mir* hat und 雲, welches *un* gesprochen wird, eingesetzt. (Bei dem ersteren bedeutet das Zeichen 浦 Bucht und 津 Landungsplatz, bei dem letzteren bedeutet das Zeichen 山 Berg und 峰 Gipfel.)

Die Verwendung der chinesischen Zeichen bei den alten koreanischen Ortsnamen geschah in sehr mannigfaltiger Weise, wie oben erwähnt. Es lässt sich daher sehr schwer entscheiden, wie man seinerzeit den Namen des Landes 百濟 aussprach. In Japan bediente man sich dafür von den

ältesten Zeiten her der Leseart *Kudara*, was eine der wichtigsten Unterlagen für das Studium dieser Frage abgibt. Auch die Landesbezeichnung 百濟 wurde mit 伯濟 und 百殘 ausgedrückt. Von diesen Zusammensetzungen wurden 百 und 伯 nach alter chinesischen Leseart *pak* ausgesprochen, die koreanische Leseart des Zeichens 濟 (wörtlich: Fluss) ist *näru* und diejenige des Zeichens 殘 (wörtlich: Rest) *törö*. So dürften die Zusammensetzungen 百濟 und 伯濟 vermutlich *Pak-näru* und 百殘 *Pak-törö* ausgesprochen worden sein. Ferner finden sich unter den alten koreanischen Ortsnamen sehr zahlreiche, die dem *tara* ähnliche Aussprache aufweisen. Solche kommen im « Nihon-shoki » sehr häufig vor: z. B. *Tara* (多羅), *Tora* (耽羅), *Tomu-tare* (耽彌多禮), *Ta-tara* (多々羅) usw. Nun heisst aber im Altkoreanischen der Berg *tar*. In alten Zeiten wurden in Korea Schlösser und Städte meistens auf Bergen angelegt. Das Koreanische *tara* soll also ursprünglich Berg bedeutet haben. Im Koreanischen besteht zwischen den Lauten *n* und *t* eine sehr enge Beziehung. Das heutige koreanische *nara* (Land) ist demnach mit dem *tara* das gleiche Wort und folglich ist *Pak-nara* dem *Pak-törö* gleich. Um den Beweis hierfür zu erbringen wollen wir ein Beispiel anführen; im « Nihon-shoki » ist die Hauptstadt des Landes Päk-chyöi 熊川 (*Koma-nari*) mit 熊山 ausgedrückt. Die alte koreanische Leseart des Zeichens 川 (Fluss) *nari* nimmt also mit derjenigen des Zeichens 山 (Berg) *tar* gleiche Stellung ein. Während der Silla-Periode trat 熊州 an Stelle des Namens für die oben erwähnte Hauptstadt; das ist die wörtliche Übersetzung des letzteren. Kurz, 百殘 wurde ursprünglich *Pak-tara* und 百濟 *Pak-nara* ausgesprochen,

von denen *Pak* Pak (狛)-Rasse und *tara* oder *nara* Bergschloss oder Land bedeutet. Die ursprüngliche Bedeutung der Landesbezeichnung 百濟 muss daher „das Land der Pak (狛)-Rasse“ gewesen sein. Die obige wird in Japan *Kudara* ausgesprochen; diese Aussprache rührt von *Pak-tara* her, indem der Anlaut *pa* ausgefallen ist.

## V.

Nach der Tradition über die Entstehung Koreas, die sich im Geschichtswerke «Tong-kuk-thong-kam» (東國通鑑) findet, kam einst eine Gottheit in dem Lande unter einen Sandelbaum vom Himmel herab; die Einwohner forderten sie auf, ihr Oberhaupt zu werden und nannten sie Tan-kun (檀君 d.h. wörtlich: Sandelbaum-Herrscher). Diese errichtete die Residenzstadt in Phyöng-yang (平壤), von wo sie später nach Päik-ak (白岳) verlegt ward. Nach einer Version ist nun der obige Ort Päik-ak nichts anders als Ku-uör-san (九月山) in der Präfektur Mun-hoa-hyön (文化縣). Der Ursprung der obenerwähnten Tradition dürfte unserer Ansicht nach in Verbindung mit dem Namen *Pak-tara* (das Land der Pak-Rasse) zu suchen sein.

Über den Herrn Pak (朴), Gründer der sillaischen Dynastie, ist im Geschichtswerke «Sam-kuk-sä-keui» (三國史記) etwa folgendes erwähnt: dieser Pak (朴) wäre aus einem grossen Ei geboren, der kürbisförmig war. Da in Silla der Kürbis *pak* genannt wurde, so habe er das mit *pak* (Kürbis) gleich auszusprechende Zeichen 朴 (*pak*) als Familiennamen angenommen. Ferner ist in demselben Werke erwähnt, der Premierminister Herr Pak (緡公) habe seinen

Namen davon erhalten, weil er vom Meer herkam, indem er sich der Kürbisse als Schwimmblasen bediente. Nun heisst der Kürbis, wie bereits erwähnt, auf Koreanisch *pak* und die koreanische Leseart des Zeichens 瓠 ist ebenfalls *pak*. Die obige Deutung ist deshalb nichts weiter als eine Tradition, die entstanden ist, indem die zwei Familiennamen 朴 (*Pak*) und 瓠 (*Pak*) mit Kürbis verbunden wurden.

Doch kehren wir zu der Überlieferung betreffs des Tan-kun (檀君 = Sandelbaum-Herrscher) zurück. Das Koreanische für Sandelbaum heisst *pak-tar* und so lautet auch die Aussprache des Zeichens 白 im Ortsnamen 白岳 *pak*; ferner ist die alte koreanische Leseart des Zeichens 岳 *tar*. 白岳 wird also auch *Pak-tar* ausgesprochen. Weiterhin spricht man das Zeichen 九 im Ortsnamen 九月山 *ku* und die koreanische Leseart des Zeichens 月 ist *tar*. 九月 kann daher *ku-tar* ausgesprochen werden. Wir sind deshalb zu der Annahme berechtigt, dass der Tradition über Tan-kun (檀君) die Ortsnamen Päk-ak (白岳) und Ku-uör-san (九月山) *Pak-tara* (das Land der Pak-Rasse) d.h. die Bezeichnung des Landes Päk-chyöi (百濟) zugrunde liegt.

## VI.

In dem Kapitel über die Geschichte östlicher Länder «Tung-i-chuan» im Geschichtswerke «Wei-chih» (魏志東夷傳) findet sich die Angabe, dass das Land Ko-ku-ryö einen grossen Fluss entlang bestanden wäre, sowie dass ein spezieller Teil desselben, der einen kleinen Fluss entlang entstanden wäre, 小水嶺 d.h. das Land der Pak-Rasse genannt worden sei. In einem anderen Geschichtswerke

liest man, dass Ku-ryö (勾驪) auch *Pak-êrh* (緡耳) genannt wurde. Auch wandten alle Kokuryöer, die sich in Japan nationalisieren liessen, das Zeichen 狛 (gleich mit 緡) als Familiennamen an. Daher ist daran nicht zu zweifeln, dass das Volk von Kokuryö zur Pak-Rasse gehörte. Ausserdem ist noch im Geschichtswerk «Chien-han-shu» (前漢書) das Land Kokuryö mit den Zeichen 高勾驪 oder 勾驪 bezeichnet. Auch hiess der Familienname des Gründers des Landes Kokuryö Chyu-mong (朱蒙) *Ko* (高); das Zeichen 高 (*ko*) im Landesnamen 高勾驪 (*Ko-ku-ryö*) muss dementsprechend der Familienname des Gründers der Dynastie sein, sodass der Landesname vom Zeichen 高 getrennt, also 勾驪 (*Ku-ryö*) zu denken wäre. Und dieses Zeichen 高 (*ko*) soll auch wie *Pak-tara*, das in Japan *Kudara* ausgesprochen worden ist, aus *pak* entstanden sein, indem *pa* in *pak* wegfiel. 勾驪 (*Ku-ryö*) gilt wie 加羅 (*Ka-ra*), 古離 (*Ko-ri*), 狗盧 (*Ku-ro*), 溝婁 (*Ko-ru*) usw. als einer der verbreitetsten alten Ortsnamen von Korea. Nach dem «Wei-chih» (魏志) bedeutet 溝婁 (*ku-ru*) auf Kokuryöisch Schloss: demnach bedeutet 高勾驪 (*Ko-ku-ryö*) die Festung der Pak-Rasse, in anderen Worten: das Land der Pak-Rasse. Woher kommt es nun, dass die Japaner den Landesnamen 高驪 (*Ko-ryö*) und den Familiennamen 狛 *Koma* zu nennen pflegten? Hierüber gehen die Ansichten zwar weit auseinander, unserer Ansicht nach muss aber das Zeichen 狛 zur Japanisierung der Familiennamen der Nationalisierten nach japanischer Lesart ausgesprochen worden sein. Dieses 狛 ist eine Vereinfachung für 緡; das letztere ist im etymologischen Wörterbuch «Shuo-wen» (說文) auch durch 緡 oder 貉 vertreten und erläutert, dass das Zeichen 緡 ein gelbschwarzes Tier bedeutet,



das dem Bären ähnlich sei. In einem anderen Wörterbuch «Shin-sen-ji-kyo» (新撰字鏡) ist erwähnt, dass dieses eine Art Leopard sei, dem Bären ähnlich und von gelbschwarzer Farbe. Ferner findet man im koreanischen Wörterbuch «Chyön-eum-ok-phyön» (全韻玉篇) erwähnt, dass 豹 der Name eines dem Bären ähnlichen Tieres sei. Nun heisst der Bär auf Japanisch *kuma* und auf Koreanisch *kom*. Man sprach das Zeichen 豹 nach Japanischer Leseart *koma* aus. Diese Leseart wurde später so allgemein gebraucht, dass in Japan endlich für den Landesnamen das Wort *koma* allgemeine Anwendung fand.

## VII.

Nach der Auffassung eines chinesischen Gelehrten Yen-shih-ku (顏師古) sollen die Völker in den drei HAN (三韓) sämtlich aus der Pak (貉)-Rasse entsprossen sein. Demnach ist ohne Zweifel darauf zu schliessen, dass das Volk von Silla derselben Rasse seinen Ursprung verdankte. Sowohl das Zeichen 朴, der Familienname des Gründers der sillaischen Dynastie als auch das 狐 im Namen des Premierministers, 狐公 lauten nach koreanischer Leseart *pak*; diese beiden wären somit ebenfalls aus dem Namen *Pak* (貉) abzuleiten.

Der Rassenname Pak (貉) kommt schon in sehr alten Büchern vor; im «Chou-li» (周禮) findet sich 九貉 (neun Pak); in «Lun-yü» (論語) steht 蠻貉之國 d. h. das Land von Pak-Rasse. Von dieser Rasse stammten die Völker Pu-yö (扶餘), Ok-chyö (沃沮) usw. ab. Wenn daher die obenerwähnte Auffassung als wohl begründet angenommen werden kann, so können wir darauf schliessen, dass alle Völker auf der Halbinsel von

Korea Teile der Pak-Rasse waren, die von Norden nach Süden hereinwanderten.

### VIII.

Wir haben uns in den obigen Kapiteln mit der Herkunft der koreanischen Völker befasst. Sodann wären die Verhältnisse zwischen Japan und Korea in uralten Zeiten weiter zu betrachten. Aus unserer Untersuchung über die Konstruktion der japanischen und koreanischen Sprache hat sich für beide eine gemeinsame Grundlage ergeben. Es erübrigt nun noch das Ergebnis der Studien über die alten Ortsnamen von Japan und Korea hier wiederzugeben, um damit zu der wissenschaftlichen Erforschung der Verhältnisse zwischen den beiden Ländern beizutragen.

Unter den koreanischen Ortsnamen finden sich solche in grosser Zahl, die Endungen *pur*, *kor*, *ki*, *siki* usw. besitzen. Alle diese bedeuten Städte oder Festungen. Unter den altjapanischen Ortsnamen finden wir eine grosse Zahl solcher, die den obengenannten sehr ähnlich lauten. Wir wollen durch Vergleich solcher Ortsnamen von Japan und Korea den Beweis erbringen, dass sie alle aus einem und demselben Ursprung abstammten.

- 1) Ortsnamen, die mit *pur* ähnlich auszusprechende Endungen haben.

Das Land Silla hiess ursprünglich 徐羅伐 (Syö-ra-pör). In der japanischen Geschichte ist der Landesname 新羅 *Si-ra-gi* ausgesprochen, von welchem *Si-ra* eine aussprachliche Übertragung von 徐羅 (Syö-ra) und *gi* eine solche von 伐

(pör) ist. Dieses 伐 (pör) entspricht dem Japanischen 城 (*ki*=Schloss), es ist ein altes gebräuchliches Wort zur Zeit der drei HAN (三韓). Ferner sind diesem ähnliche Ortsnamen: 不離 (*Puri*), 卑離 (*Piri*), 頗利 (*Phari*), 多伐 (*TA-pör*), 仇火 (*KU-pur*) etc. Im « Nihon-shoki » finden sich 比利 (*Piri*), 阿夫羅 (*A-pura*) usw. Da nun in der koreanischen Sprache der *p*-Laut dazu geneigt ist, in den *w*-Laut überzugehen und schliesslich wegzufallen, so ist wohl anzunehmen, dass von den Ortsnamen *Sa-wara* (草羅), den man im « Nihon-shoki » findet, ferner *A-ra* (阿羅), *Syö-ra* (徐羅), *Ka-ra* (駕洛), *Sa-ro* (騶盧) usw. *wara*, *ra* und *ro* Abkürzungen von *pör* sind. Diesem *pör* entspricht das Altjapanische *hure*: im « Nihon-shoki » ist das Zeichen 村 (Dorf) *hure* ausgesprochen; im « Man-yo-shu » sind die Zeichen 石村 (wörtlich: Stein-Dorf) in der Lautform *Iha-re* gegeben, was die Abkürzung von *Iha-hure* ist. Da nun in Altjapan der Laut *h p* ausgesprochen wurde, so gleicht *hure* dem *pure*, was dem Koreanischen *pör* gleich ist. Und im Japanischen zeigt sich derselbe Hang des Lautes *p* wie in der koreanischen Sprache in den *w*-Laut überzugehen und zuletzt wegzufallen; demnach sprechen schwerwiegende Gründe für die Identität des *huru*, *hira*, *hari* und *hori* in den Ortsnamen *Huru* (振), *Hira* (比瓦), *Na-hari* (名振) und *Na-hori* (直入), ferner auch *wara* im *Sa-wara* (早瓦) und *ra* in den *Yu-ra* (由瓦) und *Na-ra* (奈瓦) usw. mit dem Koreanischen *pör*.

## 2) Ortsnamen mit an *kor* anklingenden Endungen.

In Korea findet man weiterhin zahlreiche Ortsnamen, die dem *kor* ähnlich lauten: z. B. *Kara* (加羅), *Kori* (古離), *Kuro* (狗盧), *Kuru* (溝樓) usw.; auch weist das « Nihon-shoki » als koreanischen Ortsnamen *Kosi-kori* (己叱已利) auf. In dem

chinesischen Geschichtswerke « Wei-chih » (魏志) aber ist erwähnt, dass *ku-ru* (溝澗) auf Kokuryöisch Schloss bedeutet. Weiterhin sind in Silla Ortsnamen wie *Kupur* (仇火), *Tar-kupur* (達向火) usw. vorhanden. Auch in der Geschichte von Päk-chyöi, die im Geschichtswerk « Pei-shih » (北史) zu finden ist, ist erwähnt, dass die Hauptstadt von Päk-chyöi *Kopar* (固拔) hiesse; und auch das « Nihon-shoki » berichtet uns von einem Ortsnamen *Yubi-kohori* (熊備己當理) und dergl. Demnach ist *Kupur* als ein ganz typischer koreanischer Ortsname anzusprechen, der vermutlich ursprünglich *khu-pör* d.h. „grosses Dorf“ bedeutet haben dürfte. Und das obenerwähnte *kor* ist als eine Abkürzung jenes *khu-pör* anzusehen. Ebenso finden sich in Japan diesem ähnlich lautende Ortsnamen in grosser Zahl, z.B. *Karu* (羈), *Kuri* (久利), *Sa-gara* (相樂), *Na-gara* (長柄), *Ma-gari* (馬) usw.

3) Ortsnamen, die dem *ki* oder *siki* ähnlich lautende Endungen aufweisen.

Unter den alten koreanischen Ortsnamen treten uns solche in grosser Zahl vor Augen, die dem *ki* oder *siki* ähnlich lautende Endungen haben. z. B. *Tar-küi* (達己), *Ung-ki* (熊具), *Küno-ki* (斤烏支), *Ok-ki* (王岐), *Ta-säki* (多斯具), *Pör-syuki* (戊首具) etc. Auch finden sich unter den im « Nihon-shoki » angegebenen koreanischen Ortsnamen *Sini-ki* (斯二岐), *Sihu-ki* (批服岐), *Tsuku-siki* (都久斯岐), *I-siki* (伊斯具), *Mu-siki* (牟雌具) usw. Diese *ki* und *siki* bedeuten, wie wir im Folgenden erwähnen wollen, ursprünglich Schloss. Die koreanischen Ortsnamen wie *Kuör-ki*, *Yör-ki*, *No-säki* usw. die in uralter Zeit resp. mit den Zeichen 闕支, 悅具, 奴斯具 etc. wiedergegeben worden waren, finden wir in der sillaischen Periode mit den Zeichen 闕城, 悅城, 儒城 usw.

versehen, von denen das Zeichen 城 (*ki*) Schloss bedeutet. Im « Nihon-shoki » ist der päikchyöiische Ortsname Tsuru-*suki* mit den Zeichen 州柔城 anstatt derjenigen 州流須岐 gegeben; auch ist das Zeichen 村 (Dorf) im Ortsnamen Oru-*suki* (意流村) *suki* (anstatt *mura*) dargestellt. Und so wird auch das Zeichen 城 (Schloss) nach der japanischen Leseart *ki* oder *siki* ausgesprochen. Das Zeichen 牧 (Wiese) wird *muma-ki* und 厩 *hori-ki* ausgesprochen, wobei *muma-ki* eigentlich 馬城 (馬 = Pferd, 城 = Schloss) also: Pferdeschloss und *Hori-ki* 堀城 (堀 = Graben, 城 = Schloss) also: mit Graben umgebenes Schloss bedeuten. Ferner werden Festungen und feste Plätze auf Japanisch *soko* genannt; und in Lutschu bedient man sich für das Schloss der Bezeichnung *gu-suku*. Diesen beiden Wörtern aber ist derselbe Ursprung zuzusprechen wie *siki*. Man nannte in alten Zeiten Städte *ki* oder *siki* (Schloss), weil damals die Städte eine Art mit Befestigungen umgebener Zufluchtsorte waren. In Japan nannte man den Kaiserlichen Palast MOMO-*siki*-NO-OHO-MIYA (=grosser Palast mit hunderten Schlössern), woraus man über die Lage der Dinge in uralter Zeit ein ungefähres Bild machen kann.

Man sprach in Japan den Landesnamen 新羅 (Silla) *Sira-gi* und den Ortsnamen 相樂 (Sagara) *Sagara-ki*; diese Fassung entstand dadurch, dass den Ortsnamen die Endung *ki* (城 = Schloss) hinzugefügt wurde. Ausserdem sind solche Ortsnamen in grosser Zahl vorhanden, die mit *ki* oder *siki* lautverwandte Endungen haben, z. B. To-*ki* (土岐), No-*gi* (能義), Ta-*ki* (多藝), He-*ki* (日置), *Siki* (志紀), A-*siki* (安食), Mi-*suki* (三木), *Saki* (散吉), *Suka* (須可), *Suku* (宿久), *Suki* (周積), Ma-*siki* (益城) usw. usw.

Im Obigen haben wir dargelegt, dass *pur*, *kor*, *ki*

und *siki* resp. Dorf, grosses Dorf und Schloss bedeuten und dass die Ortsnamen, die in japanischer und koreanischer Sprache gemeinsamen Ursprunges sind, in Japan und auf der koreanischen Halbinsel weitere Verbreitung zeigen. Da sich nun die Ortsnamen auf eine längere Zeit an den betreffenden Orten erhalten und nicht leicht ändern, so liefern sie uns ausser Schriftstücken wichtige geschichtliche Quellen über die Völkerwanderungen, über den Verkehr der Völker untereinander.

Zum Schluss sei es uns gestattet, über das Ergebnis der vorliegenden Abhandlung noch einmal kurz zusammenzufassen. Auf der Halbinsel von Korea entstanden zwar zahlreiche Staaten der Reihe nach und gingen wieder nieder. Es ist uns heute aber mangels geschichtlicher Quellen unmöglich, die zu Grunde liegenden Beziehungen der Länder genau festzustellen. Indessen überliefern uns die Sprachen bis heute noch Tatsachen der älteren Epochen, indem sie unabhängig von der Entwicklung und dem Niedergange der Länder geblieben sind. Und es ist gelungen in der vorliegenden Abhandlung nachzuweisen, dass die japanische Aussprache *Kudara* für den Landesnamen Päik-chyöi (百濟), der früher Pak-tara hiess, die Abkürzung von *Pak-tara* ist, dass *pak* im Pak-tara und auch im alten Landesnamen *Pak-kuryö*, der später Ko-kuryö hiess, ferner noch ein anderes *Pak* (朴), der Familienname des Gründers der sillaischen Dynastie, sämtlich aus der Pak-Rasse, zu der die Völker dieser Länder gehörten, hervorgegangen sind, sowie dass *pur* (Dorf), *kor* (grosses Dorf), *ki* (Schloss) usw. Gemeingut der japanischen und koreanischen Sprache sind und uns in

zahlreichen Ortsnamen von Japan und Korea entgegneten, woraus wir zu dem Schlusse gelangen, dass zwischen den Völkern beider Länder untrennbar enge Beziehungen von alters her bestanden.